

## 競技力向上システムの構築

～大津高ラグビー部から大津緑洋高ラグビー部へ～

山口県立大津緑洋高等学校

岩 本 圭 史

## 1 はじめに

本研究は、大津高校ラグビー部における発掘、育成、強化システムから、大津緑洋高校ラグビー部における新たなシステムの構築までの過程を追跡調査することにより、本校ラグビー部の競技力向上を目指し、始めたものである。

競技力向上には、発掘、育成、強化システムの構築とプログラムの確立が鍵であると考えている。システムの構築には、個やチームの成長が必要なだけでなく、学校や地域が創り上げてきた伝統が大きな影響を及ぼしている。伝統は、システムの形成に不可欠な無形の変わらない文化である。毎年選手の入替わりがある高校部活動において、不易の文化はシステムを強固なものとし、個やチームの特徴を最大限に発揮させるものである。しかしながら、個が弱ければ、システムは成立しない。プログラムは、個を成長させるものである。

## 2 学校、部の概要

### (1) 大津高校、大津高校ラグビー部概要

大津高校（現大津緑洋高校大津校舎）は、山口県の北西部に位置する長門市に設立された県立高校である。普通科の進学校として地域と共に発展を遂げてきた。

大津高校ラグビー部は、昭和 39（1964）年創部、過去花園出場 19 回、昭和 58（1983）年度の第 63 回大会ではノーシードから 3 位に勝ち上がるという快挙を成し遂げ、「大津旋風」として一世を風靡した。その後も、ベスト 8 が 1 回、ベスト 16 が 3 回、9 年連続花園出場などの実績を残している。

私が赴任した平成 22（2010）年は、8 年間花園から遠ざかっており、少子化の影響からか、なんとか単独チームを保っている状態であったが、長い伝統と輝かしい実績を持つ大津高校ラグビー部には、地域に根ざした発掘、育成、強化システムが存在した。

### (2) 大津緑洋高校、大津緑洋高校ラグビー部

人口約 35,000 人の長門市には大津高校の他、農業の専門高校である日置農業高校と水産の専門高校である水産高校の 2 校の県立高校があった。大津緑洋高校は、平成 23（2011）年 4 月、「第 1 期県立高校将来構想」に基づきこれら長門市内の 3 校を再編整備することで誕生した。

水産高校ラグビー部は存続こそしていたものの、近年は部員が減少し、統合時は休部状態であった。ラグビー部としては大津高校より歴史が古く、昭和 27（1952）年創部、昭和 31（1956）年には花園初出場を果たしている。その後、計 8 回の花園出場があり、水産、大津両校は、長く山口県高校ラグビー界をリードする存在であった。

大津緑洋ラグビー部は、1 期生が 3 年生になった平成 25（2013）年に 12 年ぶりの花園出場を果たし、新たな歴史を歩み始めた。花園出場には様々な要因が考えられる。そのなかでも大きなものは、大津高校ラグビー部時代における発掘、育成、強化システムが上手く機能したことにあった。しかしながら、翌年は県決勝で敗退し、その後は決勝戦へも手が届かない状態が続いている。

## 3 研究方法

平成 18（2006）年から平成 22（2010）年までの大津高校ラグビーフットボール部員、平成 23（2011）年から平成 29（2017）年までの大津緑洋高校ラグビーフットボール部員を対象に、新体力テストにおける測定項目とアンケート項目、及びラグビー経験について経年変化を比較した。

## 4 大津モデル

### (1) 育成、強化システム

① 「伝承」～知育システムと効果～

まず、基礎基本の習得を軸に、キーファクターを使いイメージの共有をすることである。これは、動きを具体化することにつながり、役割やすべきことが明確になる。また、単語でのコミュニケーションは練習中や試合中の評価や修正活動を簡単にすることができる。いわゆる、PDCA サイクルの自動化である。

次に、コーチや先輩からインプットしたものを、チームメイトや後輩へとアウトプットする作業を繰り返すことである。知識の定着を図るだけでなく、リーダーシップや主体性の育成ができる。(図 1,2)

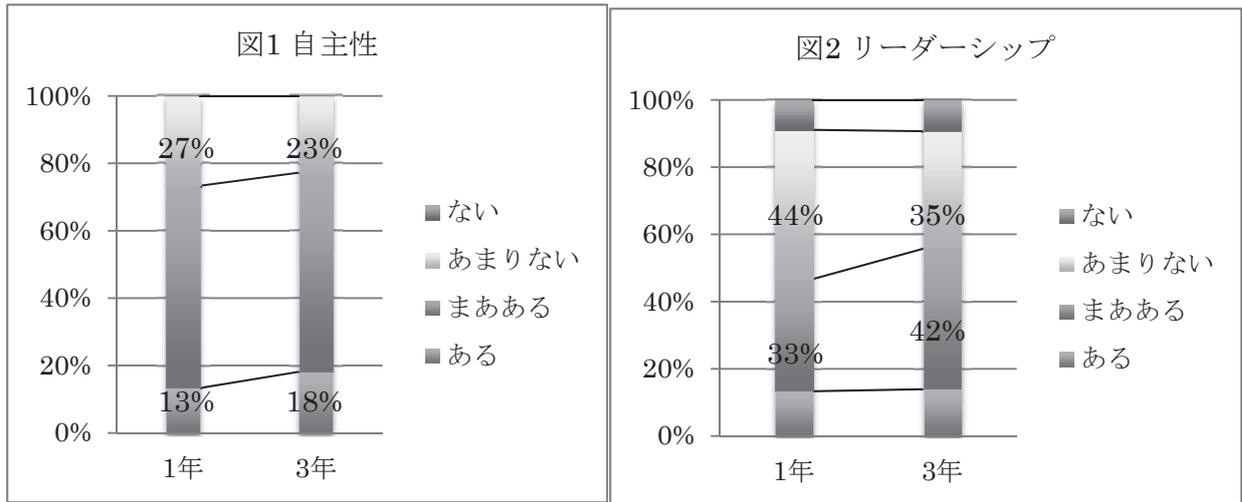


図 1,2 は、大津高ラグビー部最後の 5 年間と大津緑洋高ラグビー部 1 期生を合わせた、6 年間の部員データの平均値を追跡したものである。

② 「大津プライド」～徳育システムと効果～

大津高校では、文武両道を掲げ、短時間で最大の効果を求める校風があった。部活動においても、献身的で、より良いものを作り上げようとする雰囲気があり、個人よりもチームのことを優先して考えことができるようになっていた。

その特徴は、学校が創り上げてきた文化を土台にし、「大津プライド」を植え付けることにあった。長門のリーダーである、もしくはリーダーになるのだという誇りと、山口県高校ラグビーは自分たちがけん引するのだという誇り、これらが「大津プライド」である。「大津プライド」を持つことは、限界への挑戦を簡単にし、感情のコントロールができるようになることへとつながった。大津ラグビーの特徴である、ひたむきさや苦しい時も次への一步を踏み出す意欲、粘り強さを生み出した。(図 3)

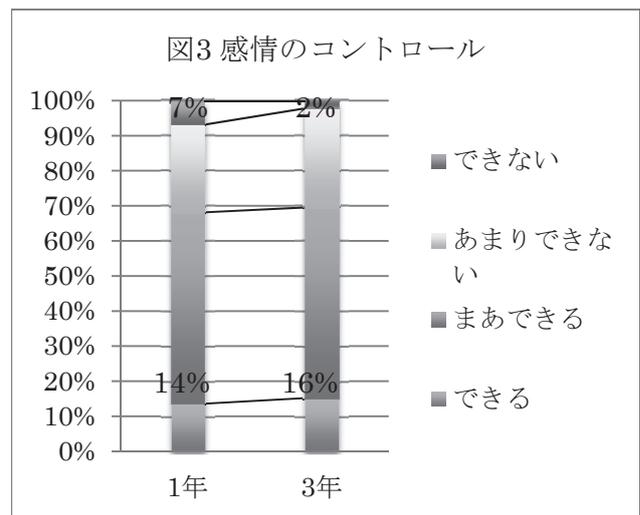


図 3 は、図 1,2 と同様の追跡である。

③ 「走れ！タックル！」～体育システムと効果～

「走れ！タックル！」の合言葉は、全国3位になった当時からのものである。運動の基本動作である走ることを大切にする、すなわち基礎基本の徹底と、防御でも攻撃的にタックルをすること、勇気を持って何度もチャレンジする精神を表している。それは、フィットネスとフィジカルの強化でもあり、ラグビーに求められる体作りの柱である。先輩をはじめ、OBから教わることも多く、このフレーズを誰もが知っていることに気づいているため、取り組みに際しては目の色が違っていた。

(2) 大津モデル完成に向けての取り組み

① プログラムの作成

3年間、もしくは1年間を見据えた育成、強化計画を立案するにあたり、部員アンケートを実施し、練習計画や練習時間・内容、練習環境やコーチへの要望まで幅広く意見を聞いた。そのうえで、選手のリーダーとコーチがミーティングを繰り返して作成や修正を行っていった。これらは一つの動機付けになり、主体的に自チームをはじめターゲットチームの分析や、具体的な目標設定、意欲的な行動へと発展していった。アクティブラーニング形式である。

特に平成22(2010)年度入学生は、大津高校最後の入学生・卒業生として、また、平成23(2011)年度入学生は、大津緑洋高校最初の入学生・卒業生として、学校の歴史、部の歴史に名を刻むべく、情熱的な熱意を持っていた。

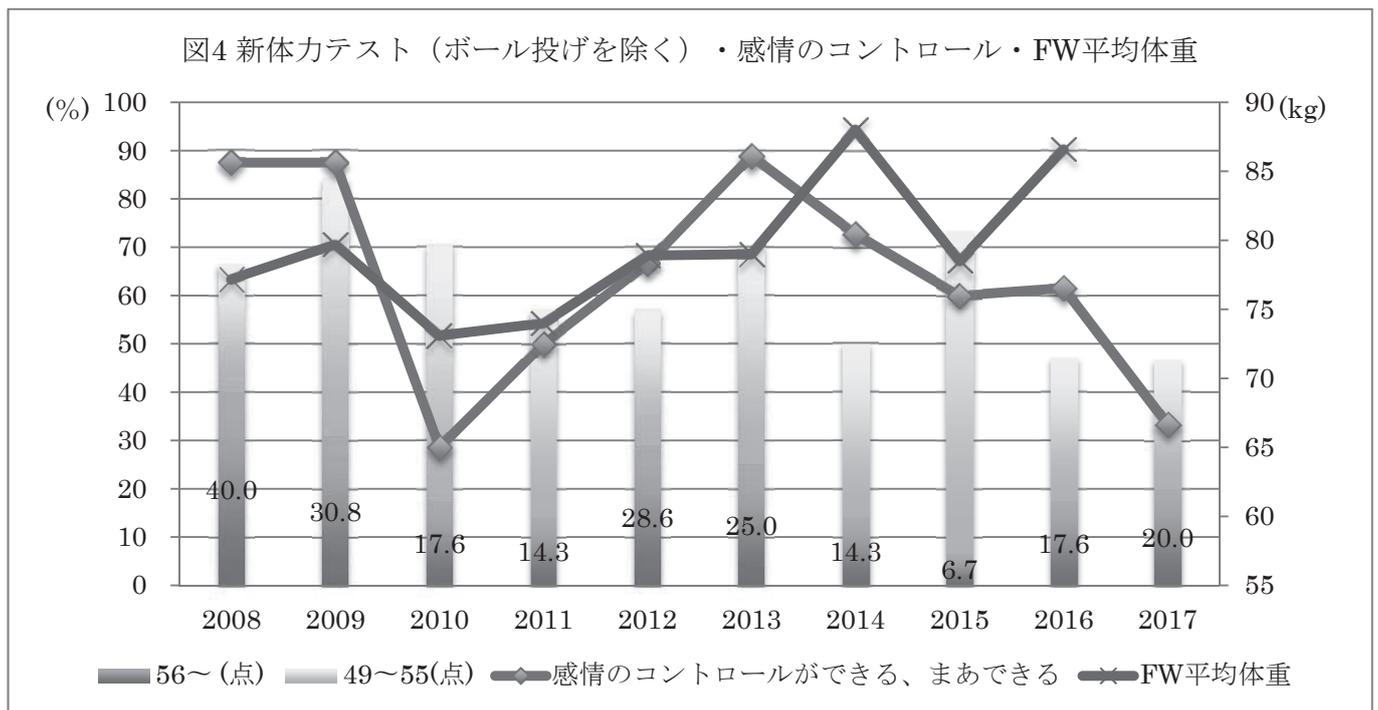


図4の「新体力テスト（ボール投げを除く）」「感情のコントロールができる、まあできる」は当該年度における2,3年生を対象とした。

② 専門家との連携

プログラムの実施にあたり、外部の専門家との連携を模索した。体重増加は筋力向上とセットにし、アスレチックトレーナーと連携を図った。体のケアは元プロスポーツ選手であった整体師と連携し、メンタルトレーニングも行った。スキルは、スポットコーチやアドバイザーを主にOBへとお願ひした。いずれも限定的指導であるため、評価と修正のみに目的を絞った。

## 5 地域との連携

### (1) 発掘システムと卒業後の地域貢献

発掘、初期の育成を担っているのは、概ね大津高校及び水産高校のラグビー部 OB である。

長門ラグビースクールでは、これら OB が指導者となり、小学生を対象に、週 1 回ラグビーの指導に当たっている。少数ではあるが、毎年数名が大津高校ラグビー部への入部を果たしてくるだけでなく、他の高校でラグビーを続ける者もいる。

(図 5)

また、市内外の OB らがスカウティング担当となり、運動実績のある中学生や、ラグビーに興味を示す中学生の情報を寄せてくれる。

卒業後は、長門地域の社会人ラグビーチーム「長門ノーサイドクラブ」へ所属する者がほとんどである。このクラブは、長門ラグビースクールと同様に、大津高校及び水産高校のラグビー部 OB で

組織されている。社会人リーグでの試合はもちろん、長門市ラグビーフットボール協会を支える中心的な役割を担っている。

### (2) 普及・育成システム

長門市ラグビーフットボール協会は、平成 16 (2004) 年頃よりタグラグビーの普及を始めた。最初はボランティアで授業の講師をしたり、道具を配ったりするなどの草の根活動であった。平成 19 (2007) 年には、OB が指導する小学校チームが全国大会へ出場することになり、活動は大きく花開いた。さらに、全国大会出場メンバーのほとんどが大津緑洋高校へと進学し、ラグビー部に入部した。彼らが高校 3 年生になった時に花園へ出場したのである。

平成 17 (2005) 年からは、小学生から一般の男女も参加できるタグラグビー大会を開催している。近年は、県内外より毎年約 300 名の参加があり、地域の定期イベントの一つとして定着している。部員は、運営の手伝いやデモンストレーションを行うなどして参加をしている。また、近隣小学校のタグラグビーチームを指導したり、タグラグビー教室を開催したりするなどの普及活動を行っている。

高校生の育成では、長門ノーサイドクラブとの合同練習を、週 1 回程度行っている。部員数が決して多くない現役高校生にとっては、ゲーム形式の練習ができる良い機会になっているだけでなく、伝統継承の場であり、地域の大人たちと直接ふれあう場でもある。ラグビーを通じて地域との一体感を感じられるのである。これは、学校教育の枠を超えた人材育成システムであり、強化につながっている。

### (3) おいでませ！山口国体の開催と 2019 ラグビーワールドカップキャンプ地招致

平成 23 (2011) 年、「おいでませ！山口国体」が開催され、長門市は少年ラグビーの開催地となった。強化策の一環として、本校ラグビー場の芝生化が始まった。大津高校ラグビー部は、県体育協会から強化指定を受けていたため、また、ジュニア世代の育成を強化につなげる目的で、長門市ラグビーフットボール協会の事業として始まった。もともと芝生のグラウンドであったが、近年はグラウンドの 1/5 程度しか残っていなかった。

国体終了後、地域スポーツの定着や、スポーツによる地域づくりを推進することを目的に、「我がまち

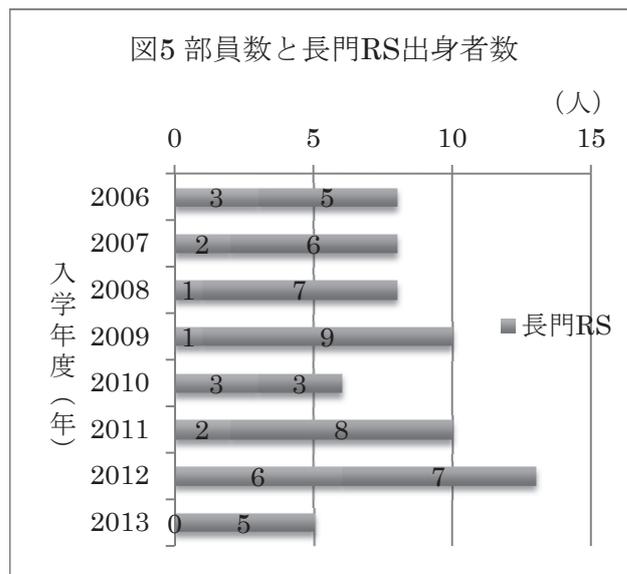


図 5 の 2012 年には、女子部員 1 名を含む。

スポーツ推進事業」という補助事業が平成 24（2012）年に山口県で創設された。長門市では、主として「ラグビーを核とする地域スポーツの推進」と「国体会場を活用した地域経済の活性化」の2つをコンセプトとする「ラグビーによるまちづくり」に取り組んでいる。

元日本代表選手やトップリーガーによるラグビー教室、指導者・審判講習会などが行われているほか、トップリーグのオープン戦や、トップキュウシュウの公式戦も組まれているなど、田舎にいながらにして都会のような環境が創り出されている。

平成 25（2013）年、平日の放課後に子ども達がラグビーをすることが出来る環境を整えようと、「長門ラグビーアカデミー」が立ち上がった。中学生がラグビーをする環境に乏しい山口県において、新しい取り組みである。ラグビースクール出身者の受け皿としてだけでなく、タグラグビーからラグビーへの移行がスムーズに行えるようにすることが目的である。（図 6）

そこで、ラグビースクール、アカデミー、高校生の一貫指導プログラムを作成し、共有した。また、この年に花園へ出場したため、大津緑洋高校ラグビー部は中学生の憧れとなっていたのである。

国体会場の活用として、平成 24（2012）年度にスポーツ合宿奨励金制度が創設された。この制度は、合宿をした団体に対して助成金を支払うもので、ラグビーで1泊以上の合宿をした場合に、1泊あたり1人2,000円を補助される制度である。

また、さらなる事業の長期化を目指し、2019年ラグビーワールドカップや2020年東京オリンピックに出場するラグビーチームをキャンプ地として長門市に誘致する取り組みがある。

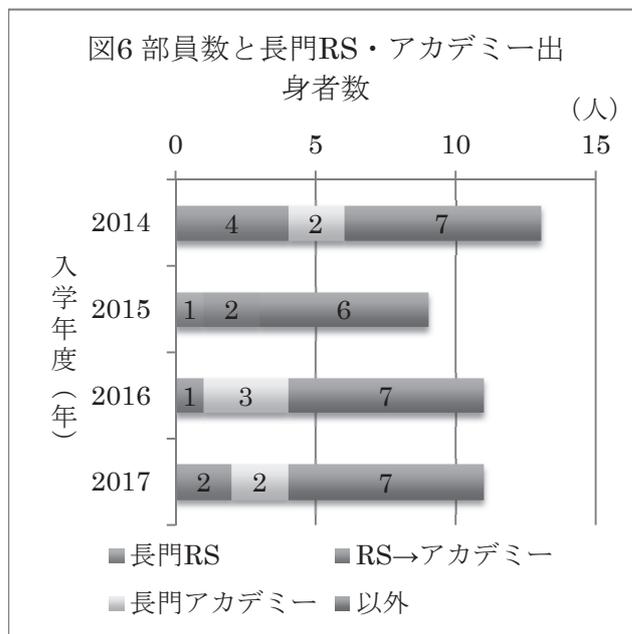


図 6 の 2017 年には、女子部員 2 名を含む。

## 6 大津モデルの崩壊と大津緑洋モデルの構築へ向けて

### (1) 徳育システム

平成 25（2013）年に花園出場を果たした大津緑洋1期生以降、大津モデルが機能しなくなっていった。大きな原因は、個の成長が鈍くなったことが挙げられる。大津モデルの特徴は、「大津プライド」によって支えられていたため、学校の再編統合により、「大津プライド」を植え付けることができなくなっていったのである。

そこで、ラグビー部への所

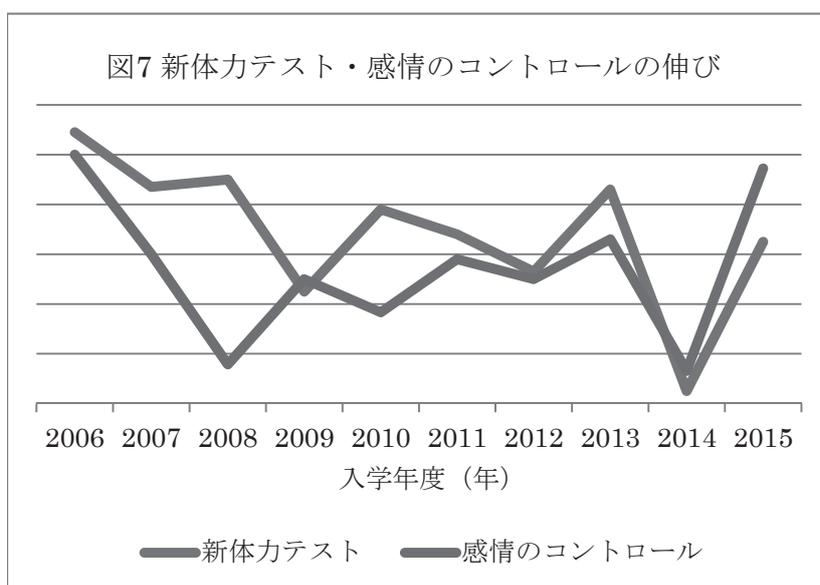


図 6 は、1 年次から 3 年次への伸び幅を数値化したものである。

属感を高めること自体に誇りを持たせようと、形を変化させていった。大津高校ラグビー部から大津緑洋高校ラグビー部に名前は変わっても、長門市内では、変わらず大津ラグビーとして応援していただいているため、応援されるチームづくりを目指した。

具体的な取り組みは、「時を守り、場を清め、礼を正す」の実践で、今年は3年目の取り組みになる。

1年目は「礼」に取り組んだ。部内アンケートからは、「挨拶や礼儀などが身についた」と全員が回答した。取り組み2年目の昨年、中国大会における開会式、閉会式の様子を見た他県の大会役員から、話を聞く態度と姿勢の良さを大いに評価されたことで、着実に成果が上がっていることを感じた。

2年目は「時を守る」に取り組んだ。新チームに移行して以来、部員全員が時間通り集合・解散ができたのは、5ヶ月目になってからであった。特に、最上級生の3年生が揃わないことが多く、この傾向は引退まで変わらなかった。

3年目の今年は、「場を清める」取り組みを行っている。特に、普段使用する部室の整理整頓を行うよう指導を繰り返している。

## (2) システムのスリム化

学校の統廃合が進められた環境下において、生徒の様子も大きく様変わりしてきた。顧問は急激な変化へ対応することが精一杯な状況で、先手を打った取り組みができなかった。また、大津モデルとしてシステムを拡大してきた結果、個の成長が追いつかなかった。

そこで、高校3年間という人生においては短期の目標である花園出場に縛られず、高校卒業後の人生を見据えた長期的な選手の成長を視野に、チームのシステム再構築を検討した。

スクラップ&ビルドに際しては、まず、中長期計画をコーチ陣で共有し確認した。次に、旧高校の枠を超えてチームの一体感を醸成するプログラムの作成を行った。これらは現在進行であるため、成果となってくれることを願うばかりである。

## 7 今後の課題

ラグビーフットボールは、チーム競技では最大の15人でチームが構成される。平成22年の大津高校入学定員は120名、大津緑洋高校となった現在は3校舎合わせて190名である。少子化の影響が公立高校部活動の競技成績に反映されていくだけでなく、部の存続問題や競技の衰退へとつながっていく恐れがある。

ラグビーを活用した地域振興を持続させるためにも、新たな発掘システムを構築していく必要があると考える。先に挙げた長門ラグビーアカデミーでは、広報活動の弱体化によりラグビースクール出身者以外の参加が少なくなってきた。国体の会場地であった長門市俵山地区では、中学校卒業生の約8割が高校の部活動にラグビーを選んでいるが、人口わずか約1,000人の小さな町であるため、生徒数は少なく、一昨年度で廃校となった。学校の部活動という枠を越えて、地域と連携しながら模索していくことが望ましい。

## 8 まとめ

地域と密接に連携した発掘、育成、強化システムは、ラグビーのまち長門特有のシステムであることは否めない事実である。しかし、少子化が進む田舎における競技力向上を考えると、地域との一体化が欠かせないのではないかと。地域が持つリソースを活用してスポーツ活動を推進することにより、地域産業が活性化し、培ってきたそれぞれの文化と融合することで新たな文化が生まれ、やがてそれがレガシーとして未来へ受け継がれていく。こうしたシステムと個を育てるプログラムとの両翼によって競技力が向上していく。そして、地域社会とのwin-winの関係性が継続していくことで、より一層地域活性化につながっていく。高校の一部活動が、地域創生の一助になることができるよう努力を重ねたい。